

おお さき やま
大 崎 山 古 墳

—高知県香南市野市町本村所在後期古墳の学術発掘調査報告書—

2013.3

香南市教育委員会

おお さき やま
大 崎 山 古 墳

—高知県香南市野市町本村所在後期古墳の学術発掘調査報告書—

2013.3

香南市教育委員会



須恵器 高杯



装飾具（ガラス玉類・耳環）

序

大崎山古墳は香南市野市町本村にあります。標高 25 m ほどの東側に開いた丘陵の斜面に造られ、古墳からは平野部を見渡すことができます。近くには、本村遺跡、兎田柳ヶ本遺跡、下分遠崎遺跡など発掘調査で様相が明らかになった弥生時代の遺跡があります。また、古墳西方には絵画銅剣（国重要文化財）が伝わる兎田八幡宮があるなど、大崎山古墳周辺は弥生時代から居住好適地だったようです。

平成 5 年、野市町文化財保護審議会と野市町教育委員会は、大崎山古墳を発掘調査の候補地として検討、古墳時代の専門家である高知県埋蔵文化財センター山本哲也氏のご指導をいただいたうえで、調査実施を決定しました。山本氏には、実際に調査を担当していただくなど、大変お世話になりました。

調査の結果、大崎山古墳は古墳時代後期 6 世紀後半の古墳で、地域の首長墓に準ずる規模であることが明らかになりました。ガラス製の玉類など副葬品も、この古墳が特別なものであることを示しています。

香南市域での遺跡発掘調査は、遺跡の記録保存を目的とした緊急発掘調査が大半ですが、この大崎山古墳の調査は、遺跡の保護と内容を把握するための調査であり、学術発掘調査になります。本調査の成果により、地域の歴史がまた一つ明らかになりました。本報告書が、文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、地権者の方はじめ、地元本村地区の方々、野市町文化財保護審議会、高知県埋蔵文化財センターなど多数の方々のご協力をいただいたことに心から御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

高知県香南市教育委員会
教育長 安岡 多實男

例 言

1. 本書は、香南市野市町本村にある大崎山古墳の発掘調査報告書である。大崎山古墳は香南市域の重要遺跡であり、発掘調査の記録と成果を整理・報告し、遺跡の保存と活用に資するものである。

2. 大崎山古墳は、高知県香南市野市町本村字奥ヶ谷大崎山に所在する。

3. 調査は、平成5年度に野市町(町村合併により現在は、香南市)教育委員会が実施した町内遺跡等確認調査により、平成6年2月7日～3月16日の間に野市町教育委員会が実施した。

平成6年3月21日(月)には、調査成果について現地説明会を開催した。

なお、古墳の石室は土圧により著しく変形し、開口状態では石室倒壊の危険性があるため、調査後に埋め戻しを行い、旧状に復している。

4. 調査は、野市町教育委員会が主体となり、高知県文化財埋蔵文化財センターの協力を得て、山本哲也(高知県文化財埋蔵文化財センター 調査第1係長)、小松大洋(野市町教育委員会社会教育課)が担当した(所属・担当は、平成5年度)。調査番号は、93-35N O Kである。

5. 本書の編集、執筆は山本が担当した。また、本報告書の最終的な図版確認作業、編集確認・校正作業については、平成24年度に香南市文化財センターで松村信博・藤方正治が分担して行った。

平成24年度の香南市文化財センター(香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係)の体制は以下のとおりである。

課 長	岡本 光広	臨時職員	宮本 幸子
係 長	小松 誠	〃	齋藤 美幸
主監調査員	松村 信博	〃	藤方 正治
調 査 員	宮地 啓介	〃	澤田 佐世
主 任	田中 和也	〃	松岡 知佐

6. 本書で使用した挿図のうち、第1図は国土地理院発行50,000分の1地形図「高知」(N1-53-28-7)を、また、第2図は「香南市都市計画図」(縮尺1/2,500)を1/2に複製使用したものである。

7. 現地作業・整理作業・報告書作成においては、発掘作業に従事された皆様方をはじめ多くの方々にご協力をいただいた。特に、石室等の現地測量作業は小松大洋、松村信博氏に、出土遺物の整理作業(水洗・注記・復元作業)は矢野 雅、岩貞泰代、岩崎佐枝さんに、実測製図作業は山本裕美子さんに多大な労を煩わせた。記して感謝申し上げます。

8. 出土遺物は、香南市教育委員会が保管している。

9. 発掘調査においては、地権者である国吉俊雄さん御夫妻を始め、国吉家の皆様方に深いご理解とご協力をいただいた。ご配慮に深く感謝申し上げますと共に、心からお礼を申し上げます。

また、地元本村地区の皆様方には全面的なご協力をいただいたほか、現地の測量作業等につい

て野市町教育委員会、同建設課の諸氏にご協力をいただいた。また、野市町文化財保護審議会委員の諸先生方にはいろいろご配慮・ご援助をいただいた。

文末ではあるが、お世話になった皆様方に厚くお礼を申し上げたい。

本文目次

I 調査に至る契機と経過	1
II 大崎山古墳の位置と環境	3
III 調査の概要	7
IV 遺物	11
V まとめ	19

本文中挿入写真

- 写真1 大崎山古墳遠景（北東から）
※手前は本村遺跡で検出された弥生中期後半の竪穴住居跡
- 写真2 大崎山古墳発掘調査現地説明会風景
- 写真3 大崎山古墳調査風景（南東から）
- 写真4 石室内より東側の平野部をのぞむ
- 写真5 石室
- 写真6 遺物出土状況

挿 図 目 次

第1図	大崎山古墳位置図 (S=1/100,000)	1
第2図	大崎山古墳の位置と周辺の地形 (S=1/5,000)	2
第3図	周辺遺跡(古墳時代)分布図 (S=1/50,000)	5
第4図	石室内土層堆積状態図 (S=1/50)	8
第5図	石室実測図 (S=1/50)	10
第6図	石室埋土中遺物出土状態図 (S=1/50)	12
第7図	石室床面遺物出土状態図 (S=1/50)	12
第8図	石室内出土土器実測図 (S=1/4)	14
第9図	石室内出土土器実測図 (S=1/4)	15
第10図	石室内出土耳環・玉類・鉄製品実測図 (S=1/2)	16
第11図	舟岩2・5・8号墳・大谷古墳横穴式石室	21

表 目 次

第1表	大崎山古墳出土土器計測表	17
第2表	耳環計測表	18
第3表	玉類計測表	18

写真図版目次

巻頭写真 (上) 須恵器 高杯 (下) 装飾具 (ガラス玉類・耳環)

PL 1 (上) 大崎山古墳遠景 (南東から) (下) 大崎山古墳遠景 (東から)

PL 2 (上) 大崎山古墳近景 (南東から) (下) 大崎山古墳開口方向 (北東から)

PL 3 (上) 大崎山古墳近景 (南から) (下) 大崎山古墳近景 (北から)

PL 4 (上) 大崎山古墳墳丘と石室開口部 (下) 大崎山古墳石室開口部

PL 5 (上) 石室検出状況 (南東から) (下) 袖石検出状況 (東から)

PL 6 (上) 土師器直口壺出土状態 (西から) (下) 耳環出土状態 (南から)

PL 7 (上) 石室全景 (南東から) (下) 石室奥壁 (南東から)

PL 8 (上) 右側壁 (東から) (下) 左側壁 (南から)

PL 9 (上) 床面の敷石 (南東から) (下) 右袖部 (東から)

PL 10 (上) 奥壁 (南東から) (下) 玄室奥壁側 (南東から)

PL 11 出土土器 (P 1～6)

PL 12 出土土器 (P 7～10・13～15)

PL 13 出土土器 (P11・12)

PL 14 出土土器 (P19～23)

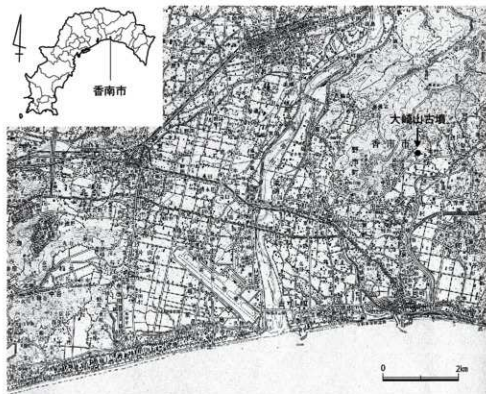
PL 15 (上) 耳環 (中) 玉類 (下) 鉄製品

PL 16 大崎山古墳の位置と周辺の地形

I 調査に至る契機と経過

大崎山古墳は、香南市野市町本村字奥ヶ谷に所在する古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳である。県道 232 号から、溜池のある本村奥ヶ谷の集落をめぐりて丘陵東側裾沿いに町道を進むと、土地区画整備が施された東側の農地から直線的に伸びた農道が T 字形に交差する付近で、道路の左手脇に少し穴の開いた高まりがある場所が見出される。この場所が、大崎山古墳の所在地で、小さな穴は石室の一部が露出している空間であり、小高い盛り土は古墳の墳丘が残存している跡である。その姿は、現在は気づかずに通り過ぎてしまう程、静かに周辺の景観に溶込みながら埋もれている。

平成元年7月から8月にかけて実施された県立野市総合公園建設に伴う大谷古墳の発掘調査では、金剛山(三宝山)から西側及び南西方向に派生する丘陵裾に築かれた横穴式石室の様相を明らかにすることができたが、この調査時に注目されたのが金剛山塊から南東方向に派生する丘陵裾に位置する大崎山古墳の存在である。周辺遺跡の踏査時に大崎山古墳に立ち寄り、当時開口していた小さな穴から石室内を観察すると、大谷古墳と類似した硬質砂岩の石室石材が使用されていることが留意された。残存する石室の形状から、大谷古墳に後続する古墳ではないかと推測され、地域の古墳時代後期の様相を探るうえで重要な古墳であることが認識された¹⁾。さらに、平成3年から4年にかけて団体営圃場整備事業に伴う本村遺跡の発掘調査では、大崎山古墳所在地の近辺で弥生時代中期後半～後期前半の集落跡が確認され²⁾、また、平成5年においては野市町兎田の兎田八幡宮の御宝物が全国的にも注目される弥生時代の絵画銅剣であることが判明するなど³⁾、本村地区の周辺に重要な遺跡が所在することが明らかとなった。



第1図 大崎山古墳位置図 (S=1/100,000)

管内に県内外から注目される貴重な遺跡が存在することが確認され、文化財保護の機運の高まりもあり、野市町教育委員会では、重要な遺跡の実態調査と町指定史跡の選定作業を含めて、従来から知見されながら内容の不明瞭な大崎山古墳を候補に選び、地権者の同意を得て確認調査を実施する運びとなった。幸いにも地権者の温かいご協力とご承諾をいただき、発掘調査関係者有志による慰霊祭を経て、平成6年2月7日に古墳調査の掘入れを行い、2月28日まで発掘作業を実施した。また、石室の実測作業など補足調査を行い、同年3月16日まで調査を実施した。3月21日(月)には、午後2時から調査成果について現地説明会を開催し、地元及び一般に公開した⁽¹⁾。

古墳の石室内には、予想以上の土があり、床面まで奥壁側で1.20m前後、玄門部で1.60m前後の流入土があった。また、当初は小規模な石室を推測していたが、これに反して残存していたのは羨道部が失われた横穴式石室の玄室部であることが判明し、石室はさらに南東方向に開口しており、いつ頃の時期か定かではないが、羨道部側は道路によって寸断されていることが明瞭となった。残されていた石室は土圧によって変形し、特に右側壁(西壁側)では傾斜角度が強く、崩壊する危険性を有していた。このため、度々補強材などで石室側壁側を固定しながら調査を行う必要があった。

石室の残存状況などから、調査後に石室を開口して公開し、見学者の利便に供することは難しく、崩壊の危険度を少なくするため調査後埋め戻しを行い、現況の姿となった。

大崎山古墳は、石室構造、玄室の規模、副葬品の所属時期などから、大谷古墳に先行する後期古墳で、群集墳が形成された横穴式石室盛行期の古墳であることが確認された。



第2図 大崎山古墳の位置と周辺の地形 (S=1/5,000)

II 大崎山古墳の位置と環境

香南市は、平成 18 年(2006) 3月に、野市町、赤岡町、香我美町、吉川村、夜須町が町村合併して誕生した市で、面積 126.51km²、人口 34,524 人を数える⁽⁵⁾。市役所は、香南市野市町西野 2706 番地の旧野市町役場に置かれている。市域の西側に一級河川物部川の河口部が、南及び南東側は海岸線と接し、北及び北東側は四国山脈の尾根部が広がっている。

大崎山古墳は、香南市野市町本村字奥ヶ谷大崎山に所在し、金剛山(三宝山・三角点標高 213.9m・頂上部 265m)に連なる丘陵頂部(標高 249.9m)から南東方向に派生した支尾根の南東裾部に位置する。香南市役所庁舎から北東に約 2.8km、物部川左岸から東に約 3.9km、海岸線から約 4.34km を測る(第 1・2 図)。古墳は、黒谷池(溜池)へと通じる町道の西脇に存在する。

古墳周辺の標高は 22～24m 前後で、背後の尾根部(標高 41.7m 前後)とは約 20m の差が、また東側の平坦な耕作地とは約 1.7～2.3m 前後の段差がある。古墳の北及び西側は標高 24～40m を測る丘陵斜面部となっている。この丘陵の北側では、北東から南西方向にかけて仏像構造線が存在し、また石灰石鉱床として知られている奥ヶ谷の採石場が所在している。

大崎山古墳は従来から知られていた古墳で、大正 10 年 12 月 1 日、郷土史家の武市佐市郎の現地調査により、「土佐の古墳」『土佐史壇第七号』に報告され(大正 11 年 2 月 11 日)、以来、「富家村本村奥ヶ谷大崎山古墳」は、野市町に現存する貴重な古墳として遺跡地名表に登録され周知されていた⁽⁶⁾。なお、古墳周辺においては、今回の調査に併せて数度の踏査を試みたが、他所に古墳の存在を確認することはできなかった。



写真 1 大崎山古墳遺景(北東から)
※手前は本村遺跡で検出された弥生中期後半の竪穴住居跡

大崎山古墳から町道を隔てた東側一帯と黒谷池の南西及び南、南東側において実施された団体営圃場整備事業(土地区画整理)に伴い、平成3年から4年度にかけて実施された本村遺跡の調査では、丘陵の尾根平坦部及び斜面部において弥生時代中期後半～後期前半にかけての集落跡が検出され、当該期の集落が存在していたことが確認された⁷⁾。大崎山古墳においても、石室内の流入土中から、弥生土器とみられる土器細片が出土している。本村遺跡の調査において、丘陵斜面部を段上に平坦化し、住居や倉庫、作業場として利用したと推測される堅穴建物が形成されていることが明らかとなり、当該期の様相を探るうえで貴重な成果が得られている⁸⁾。

大崎山古墳の調査では、五輪塔の一部が石室内に投棄されていた。この五輪塔は流入土の上部に埋もれており、比較的新しい時期に投棄されたものと考えられるが、同一部位が数個体あった⁹⁾。古墳北側の平坦部奥側から丘陵斜面部にかけて、段上地形と推測される部分が数カ所認められ、五輪塔の一部が少量散在していることから、鎌倉時代後半～戦国時代前半にかけての中世墓地在形成されている可能性を有する¹⁰⁾。高知県内では、この時期の墓地の状況についての詳細は不明確であり、今後検討を要する場所である。



写真2 大崎山古墳発掘調査現地説明会風景



番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
19-104	日吉山古墳群	野市町西佐古日吉山	131	東野土居遺跡	* 土居 1227-1	154	池の本古墳	* * 2031 他
105	父妻寺古墳	* 父妻寺	135	平井遺跡	* 字北越 723	157	岡ノ芝遺跡	* 山地 866 他
108	深湖北遺跡	* 深野字ヤノカウ	136	野口遺跡	吉川村吉原西木戸 字西野口他	162	棒ヶ谷古墳	* 下分 268 他
109	深野遺跡	* 字野ノ内・ 神ノ木 34 他	139	浜口遺跡	* 吉原浜口字 住吉畠	163	嶋呼1号墳	* * 2686-1 他
112	西野遺跡群	* 高野 1309・ 1509・1531 他	140	南中盤遺跡	* * 字南中盤	164	嶋呼遺跡	* 徳王子刈谷
118	大谷古墳	* 大谷 1395	143	ハザマ遺跡	赤岡町 2157-1~2160-1	169	徳善天皇古墳	* * 1365-2 他
119	大谷遺跡	* * 482	145	大東遺跡	* 2246~2249, 2257	15-311	上分古墳	野市町東佐古字上分
121	(竹ノ内山古墳) 瀧洲山古墳	* 母代寺字 瀧洲山 665	146	江見遺跡	* 1074	312	小山谷古墳	* * 字 小山谷 1433
126	大崎山古墳	* 本村奥ヶ谷	149	宮の西遺跡	香我美町山北 十番 1919 他			・ [高知県遺跡地図 香美・長岡ブロック] 平成2年3月 高知県教育委員会による ・ 遺跡番号は同地図番号に準拠する。
129	曾我遺跡	* 中ノ村曾我	150	宮の前遺跡	* * 1922-1 他			

第3図 周辺遺跡（古墳時代）分布図 (S = 1/50,000)



写真3 大崎山古墳調査風景（南東から）



写真4 石室内より東側の平野部をのぞむ

Ⅲ 調査の概要

1. 調査の内容

大崎山古墳は、周知の遺跡であり、黒谷池へと通じる町道を丘陵沿いに進むことによって容易に場所を確認することができる。道路側から古墳にかけては御溝脇に三段互目積み石垣が施され傾斜面への防護措置が講じられている。古墳の盛土上部には、幅 1.40m 高さ 0.45m 前後の小さな穴が開き、石室の一部が露出していた。この小穴から石室内に入り、奥壁・側壁・天井石を確認し、石室開口方向の手掛かりを得ることができた。

調査は、石室の主軸方向に平行してトレンチを設け、羨道部側から発掘作業を行った。また、石室内の流入土について堆積状況を確認するため、左側壁側(東壁側)についてさらにトレンチ調査を進め、土層観察を行いながら石室の床面検出を図った。調査が進行するのに従って、石室内の流入土は厚く、約 20cm 程度の高さで姿を見せていた奥壁側の石材は、高さ 1.40m 幅 1.25m を測る鏡石の上部であることが判明し、玄門部では床面まで約 1.60 ～ 1.90m 程度の掘削を要した。

調査区の西壁側で袖石が検出され、玄室幅に対して玄室長の長い長方形の平面を持つ玄室が存在していたことが明らかとなった。その結果、古墳の規模は、当初の推定よりも大幅に広く、羨道の大半が失われた横穴式石室であることが明確となった。玄室の床面には敷石が施され、敷石の上部から、遺物が出土した。このため、玄室全体について調査を進め、石室の図化作業を行った。

検出された石室は、土圧により変形しており、天井石が取り除かれていた玄門部の周辺では均衡が失われて側壁が玄室内へと歪曲していた。特に、右側壁側(西壁側)では丘陵部からの土圧の負荷が高く、基底石から側壁上部にかけての傾斜角度が強かった。調査中には、安全面に配慮して鉄製ジャッキ等を数本高架し、石室内での作業時間を短縮し、壁面の微振動に絶えず留意するなど細心の注意が払われた。今回の調査では、開口した石室への影響を配慮して、古墳の範囲確認等の周辺部のトレンチ調査は行わず、石室内の精査に止めた。

石室は土圧の影響により、左側壁(東壁側)では右側壁(西壁側)からの加重によって天井石の一部が反り上がり、側壁が東方向にかけて強く傾いていた。地震等の振動など、外圧によって倒壊する危険性もあり、開口したままの状態では保存公開することは難しく、石室の図化作業など、一連の調査が終了した段階で埋め戻しを行うことになり、調査後、旧状に復された。

2. 古墳周囲の状況

石室上部には、古墳の盛土の一部が残存していた。その幅は東西 2.50m 南北 3.60m 高さ 0.60m を計測する範囲で、墳丘上部の形態が僅かに残されている。町道の道路上から盛土上面までの比高差は約 1.75m 前後で、古墳周囲が高まりを有している。墳丘の痕跡がうかがわれるのは極めて限定的で、その範囲を特定することは難しい。また、今回の調査において残存する石室は、横穴式石室の玄室部で、羨道部は失われていることが確認されている。復元される古墳の範囲は、石室北側からさらに北側に広がり、羨道部の存在を考慮すれば南側は町道東縁に、また西側は、現況で約 1.30m 前後の段差のある隣接地の畑側まで広がるものと推察される。古墳周囲は蜜柑畑として開墾されて

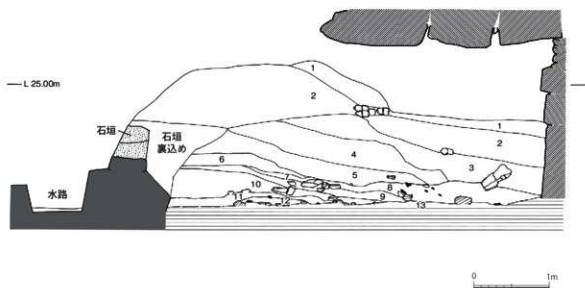
いるが、玄室の奥壁側から丘陵裾部まで約10.10mを測る範囲が馬蹄形状に平坦化している。古墳に伴う周溝等の遺構が残存している可能性がある¹⁰⁾。

3. 石室内堆積土

石室内には12層に区分される堆積土と地山層が確認された。その内容は次のとおりである。

第1層 暗褐色腐植土、第2層 淡茶色粘質土、第3層 黒褐色土をブロック状に含む暗褐色粘質土、第4層 褐色粘質土、第5層 灰褐色粘質土、第6層 淡茶褐色粘質土(硬質)、第7層 明茶色粘質土、第8層 黄茶色粘質土、第9層 灰褐色粘質土、第10層 茶灰褐色粘質土(硬質)、第11層 褐灰色粘質土(硬質)、第12層 褐色粘質土(硬質)、第13層 明黄褐色粘質土(地山)。

このうち、第1～10層は石室内への流入土で、第2層の上部から第3層上面にかけて五輪塔片が出土した。第3層には奥壁及び側壁から落下したとみられる落石が含まれる。第8層の上面は比較的平坦で、中世の土器片と共に床面から遊離した須恵器片などが出土している。また、奥壁側近くで掘込まれた攪乱穴の埋土も、この第8層である。第9層は床面から遊離したと考えられる礫石混じりの堆積土で、石室中央部から奥壁側にかけては、この層の下面から床面に布設された敷石の上端部が検出された。第10層は、玄門部から石室中央部にかけて堆積している土層で、中世の土器片を含み、玄門部付近では25～40cmの厚さを測る。第11層は硬質の堆積土で、玄門部から石室中央部にかけて堆積していた。第12層は、副葬品の土器類を含む硬質の堆積土で、床面の敷石を被覆していた。この層は、主として玄門部から石室中央部にかけて堆積していた。なお、敷石の下部(第13層)は明黄褐色粘質土(小礫混じり硬質)で、上面は奥壁側が高く石室南側にかけて僅かに傾斜していた。奥壁側と玄門部の検出面の比高差は約3～4cmを測る。第13層は地山層であると考えられる。



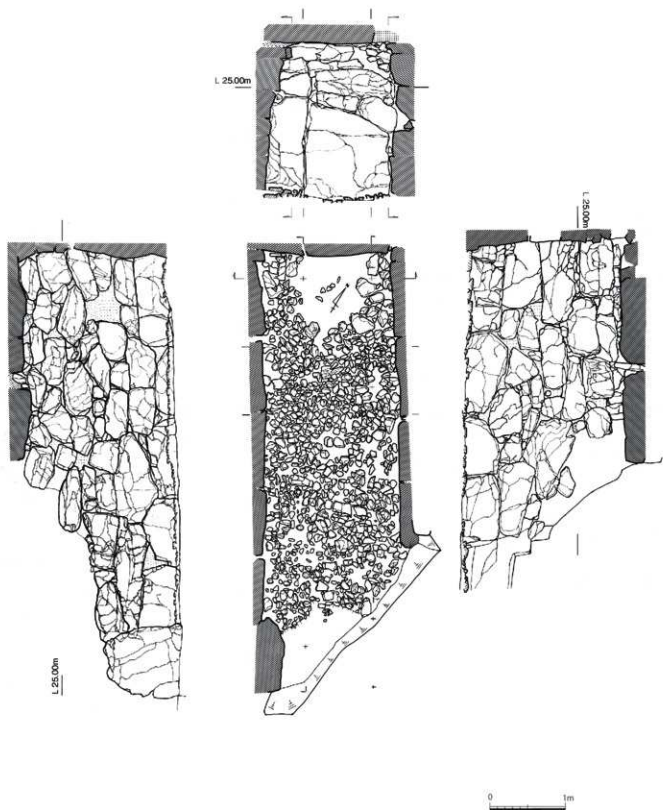
第4図 石室内土層堆積状態図 (S = 1/50)

4. 石室

横穴式石室の玄室が検出された。羨道部は後世の開墾により既に失われていた。右側壁(西壁側)で袖石が確認され、石室の構造からN-32°-Wの主軸方向をもつ両袖式の横穴式石室で、南東方向に開口していたと考えられる。玄室の平面形は長方形を呈し、玄室長5.40m、玄室幅は奥壁側で1.90m石室中央部で1.95mを測る。玄門部から羨道にかけての構造は不明で、仕切り石(敷居石)も検出されなかった。袖石は、幅1.07m長さ1.15m以上の硬質砂岩を縦長に据え、右側壁(西壁側)から0.34m程突出させていた。側壁の基底石は、長さ0.90～1.30m高さ0.30～0.60mを測る横長の硬質砂岩を横積みにし、右側壁で5石、左側壁で4石が確認された。基底石の上部に長さ0.70～1.20m高さ0.40～0.60m前後の硬質砂岩の横長の石を横積みにし、側壁を構築していた。基底石から上段3石までは、3本に区分される横目地がみられ、その間の石材は目地に合わすように充填されていた。横目地の間隔は均等ではないが、袖石の上端から奥壁側にかけて横方向の構築ラインが認められ、このラインから上部、天井石の下端にかけて石材を横積みにして充填していた。側壁を構成する石材は、扁平な風化面を持つ。壁面を入念に観察したが、線刻・石材の加工痕跡などについては確認できなかった。奥壁は2石の硬質砂岩を縦長に据え鏡石とし、天井石下端までのラインについては、硬質砂岩の石材を横積みに充填し、ほぼ垂直に壁面を構築していた。敷居が施された床面から天井石までの高さは、奥壁側、石室中央部で共に2.10mを測る。天井石は奥壁側から3石が残存し、奥壁側の2石は硬質砂岩、他はアブライト質岩石である。石室内には敷居が施されていた。石材は砂岩・石灰岩・硬質砂岩・アブライト質岩石などの割れ石で、石材間の間隔としては、石室中央部から奥壁側にかけての範囲について充填度が高く、比較的丁寧に仕上げられていた。なお、奥壁側に幅広の扁平な石材が存在することが留意され、周辺から裝飾品類が出土していることから、棺台として機能したことも考慮される。なお、排水溝に関連する遺構は確認されなかった。



写真5 石室



第5図 石室実測図 (S = 1/50)

IV 遺 物

1. 遺物の出土状況

石室中央部から奥壁側にかけては攪乱の度合いが強く、攪乱穴を中心に敷石の一部が剥がされていた。石室内の堆積土中及び攪乱穴から中世の土器片が、右袖石近くの敷石上から須恵器類が、奥壁の壁面近くで耳環・玉類などの装飾品が出土した。

石室内の堆積土のうち、第8層黄茶色粘質土・第10層茶灰褐色粘質土(硬質)は中世の土器片を含み、この段階で既に石室は開口しており、玄室奥壁側へと自由に出入りできたことが窺われる。また、第8層上面と第9層(灰褐色粘質土)上面は比較的平坦な面を呈しているのに対して、第7層明茶色粘質土より上層は奥壁側に傾斜して流入堆積し、堆積土も厚い。石室の玄門部から羨道部にかけては中世の段階に既に壊されており、崩壊の進行に伴い土砂が流入する要因となったことが推測される。

右側壁(西壁側)近くの第8層中から土師質土器小皿(P19・20)が、奥壁側の攪乱穴から鍋類の細片が、玄門部付近の第10層中から土師質羽釜(P21・22)瓦質羽釜(P23)が出土した。なお、第11層褐色粘質土の上面は、良く締まった硬質の土質をもつ平坦面で面的に検出され、中世の土器類が使用された時期の石室利用面であると考えられる。

副葬品は、第12層褐色粘質土(硬質で敷石被覆土)及び敷石上で検出された。玄室中央部から奥壁側にかけては、土器類は少なく、奥壁の壁面近くで、耳環(E1・E2)、玉類(J1)が出土した。また、鉄器(I1・2)、須恵器甕片(P13)が出土している。左側壁側では、石室中央部の壁際から土師器直口壺(P15)が出土した。遺物の集中範囲については、袖石寄りの右側壁(西壁側)周辺に須恵器高杯類(P1～P9)を中心にしたまとまりが認められた。玄室内における副葬品の配置状況についての傾向を示すものと考えられる。

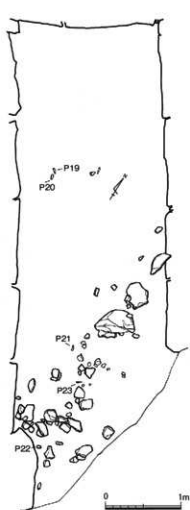
2. 遺物の観察

土器(須恵器・土師器)

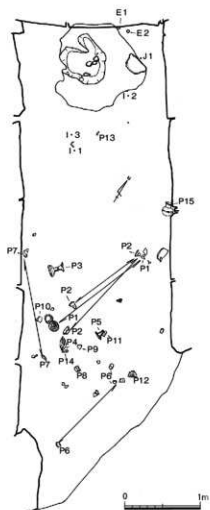
須恵器有蓋高杯(P1～4・P7)・無蓋高杯(P8・P9)・高杯脚部(P5・P6)・長頸壺(P10)・甕(P11～14)、土師器直口壺(P15)が出土した。須恵器は高杯が主体で、脚部はいずれも長方形2段2方向の透かし窓を有する。全体の形状が残る有蓋高杯では、口径10.6～11.6cm 底径12.2～13.8cm 脚部高9.4～12.5cm 器高14.1～17.5cmを計測する範囲に収まる。杯口縁部の立ち上がりは高く内傾し、杯の内高も深い。また、脚部については、下段の透かし窓が脚部部の凹線もしくは屈曲部よりも上部に位置している。須恵器高杯の形態及び成形技法等の特徴から、TK43型式併行期に位置づけられ、6世紀後半の時期に所属すると考えられる¹²⁾。土師器直口壺(P15)は胴部上半をカキ目調整したもので、胴部中央部に最大径を持ち、口縁部は緩やかに外反する。古墳時代後期の土師器の変遷を探るうえで、所属時期の明確な須恵器類と共伴した土師器として良好な資料である。



写真6 遺物出土状況



第6図 石室埋土中遺物出土状態図 (S = 1/50)



第7図 石室床面遺物出土状態図 (S = 1/50)

出土した須恵器高杯類は、本県における当該期の横穴式石室のなかでも出土点数が多く、器形・法量に一定のまとまりが認められる。杯部の口径は12cm未満、底径も14cm未満で、器高も18cm未満の範囲であるが、杯部は浅くはない。脚部は2段2方向の透かし窓であることに特徴がある。

装飾品(耳環・玉類)

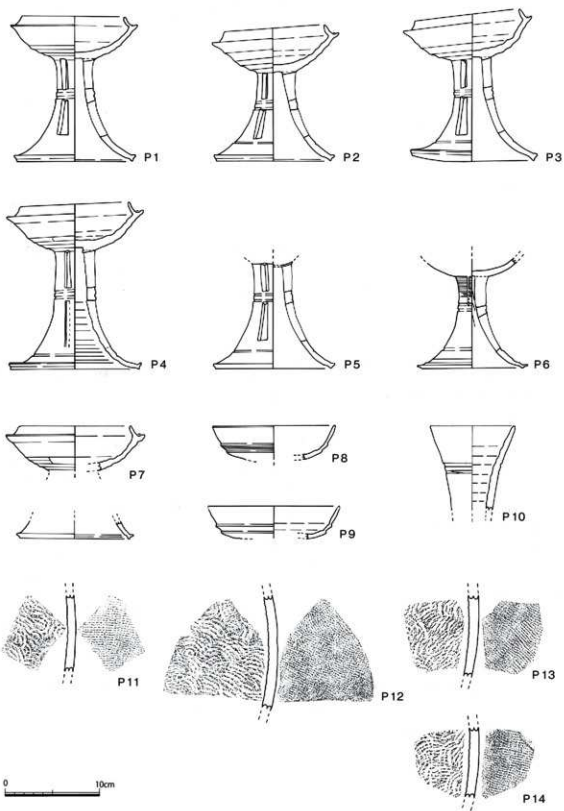
奥壁の近くで、耳環2点及び玉類1点が出土した。また、石室内の堆積土を精査した結果、第8層から第11層にかけてガラス製小玉が検出された。耳環(E1・E2)は、奥壁の壁面近くで隣接して出土した。E1は外径2.30×2.20cm厚さ0.5cm重さ4.0gを測る銅芯銀張りの銀製耳環である。E2は外径2.30×2.10cm厚さ0.5cm重さ3.0gで銅芯銀張りの銀製耳環である。E1・E2共に形状及び規格、材質が類似することから、一対となる耳環と考えられる。J1はガラス製小玉で径4.0mm厚さ3.5mm重量0.09gで緑色を呈する。攪乱穴の東縁に接して検出され、耳環の出土位置に近接する。原位置であるか不明確ではあるが、石室内の堆積土中から出土した他のガラス製小玉類の帰属位置を探る手がかりとなる。装飾品類は奥壁側に存在し、攪乱穴の掘削などの行為により掻き出されて散逸したことが推察される。

鉄製品

奥壁側周辺で4点を数える鉄製品が出土した。I1及びI3は同じ場所出土したが、接合できない。I1は現存長4.9cm幅0.9cm厚さ0.5cm重さ9.0gで断面は長方形、I3は現存長4.7cm幅1.0cm厚さ0.5cm重さ8.0gを測り断面は長方形である。類似した形態を呈する。長頸類の頸部である可能性を有するが詳細は不明。I2は攪乱土坑の南縁に接して出土した。径2.6×1.4cm厚さ0.45cm重さ1.0gを測り、断面は楕円状で環状の形態を呈する。表面が剥離して錆化した耳環の鉄芯部に類似するが、不明。I4は奥壁付近の排土中から出土した。鉄鍍で茎部及び閂部の一部が残る。鍍身は欠損している。茎部の断面は長方形で、端部にかけて細くなる。現存長6.4cm幅1.1cm厚さ0.4cm重さ10.0gを測る。

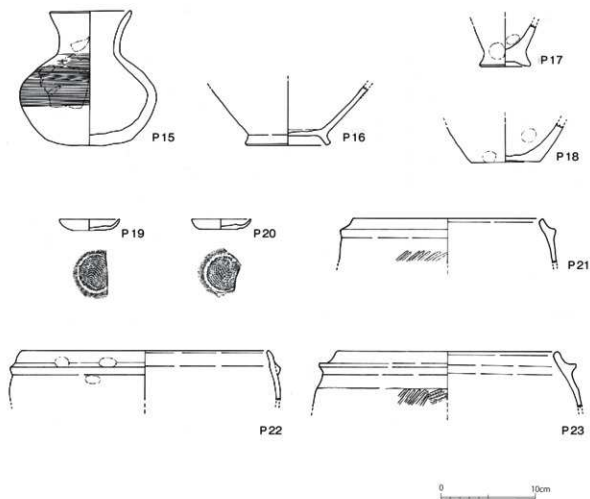
その他の遺物

石室内の堆積土中から、弥生土器片・古代の土師器片・中世の土器類・五輪塔などが出土した。弥生中期土器鉢(P17)は底部の破片で、内外面に指頭圧痕が認められる。弥生中期土器壺(P18)は底部片で平底である。P17・P18は、墳丘封土中に含まれていたものが混入したものと考えられる。古墳の周辺に所在する本村遺跡との関連性が窺われる。P16は高台をもつ土師器碗で、外方に直線的に広がる体部を有する。古代の土器類はこの土師器のみである。古墳時代以外の土器類として出土点数が多いのは、中世の土器類である。大半は、細かい破片であるが、P19～23の如く形状を残す資料も出土した。P19・20は、奥壁側の堆積土である第8層中から近接して出土した土師質土器小杯で、底部は糸切り底である。P21～23は、玄門部付近の堆積土である第10層中から出土した羽釜で、P21・22は土師質羽釜、P23は瓦質羽釜である。周辺からは羽釜の体部片とみられる破片も出土したが、口縁部側と接合はできなかった。P21～23は、15世紀前半代の資料で、なかでもP23は口縁部の形態・成形技法等から地域的な属性である「土佐型」の範疇に位置づけられる羽釜である³³。

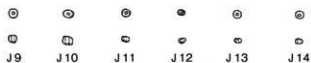


第8图 石室内出土土器实测图 (S = 1/4)

なお、五輪塔については、石室内堆積土の上部層から出土し、他所から運ばれて石室内に投棄されたことが明らかである。元の設置場所については不明確ではあるが、古墳北側の平坦地を隔てて段上地形が存在し、同様な五輪塔の破片が散在していることから、周辺の開鑿時に出土した五輪塔を石室内に集め置いたことが考えられる。出土した五輪塔は空輪・風輪・水輪の部分で、空・風の両輪が一連となったものが多く、水輪は円相を成していることなどの諸点から、室町時代を前後する時期に属するものと考えられる。



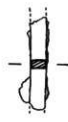
第9図 石室内出土土器実測図 (S = 1/4)



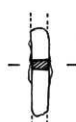
I4



I2



I1



I3



第10图 石室内出土耳環・玉類・鉄製品実測図 (S = 1/2)

第1表 大崎山古墳出土土器計測表

標図番号	出土地点 層位 遺物番号	器種	法量 (cm)				形態・特徴 (cm)	文様・成形・調整手法	胎土・色調	備考
			口径	器高	脚高	底径				
P1	玄室 床面 1・7	須恵器 高杯	11.0	15.4	10.8	12.4	有蓋高杯 2段2方向長方形形通かし意 脚部北端2本 杯部内面中央ナテ 器部外面に自然輪かかる	小砂粒を多く含む 焼成良好 杯部内外面淡青灰色 脚部暗灰色	ほぼ定形	
P2	玄室 床面 1・8	須恵器 高杯	10.6	14.1	9.4	12.2	有蓋高杯 2段2方向長方形形通かし意 脚部北端2本 杯部内面中央ナテ 杯部片側に焼成ひずみあり	小砂粒を多く含む 焼成良好 杯部内外面淡青灰色 脚部暗灰色	ほぼ定形	
P3	玄室 床面 10	須恵器 高杯	11.3	15.7	10.9	13.0	有蓋高杯 2段2方向長方形形通かし意 脚部北端2本 杯部内面中央ナテ	小砂粒を多く含む 焼成良好 杯部内外面淡青灰色 脚部外面灰色	ほぼ定形	
P4	玄室 床面 8	須恵器 高杯	11.6	17.5	12.5	13.8	有蓋高杯 2段2方向長方形形通かし意 脚部北端2本 杯部内面中央指ナテ 脚部高い	小砂粒を含む 焼成良好 杯部青灰色 脚部灰色～暗灰色	脚部欠損2/3欠	
P5	玄室 床面 9	須恵器 高杯	-	(11.3)	11.05	12.4	2段2方向長方形形通かし意 脚部に近い北端2本 脚部外面に自然輪かかる 脚部底部一部焼成ひずみ	小砂粒を多く含む 焼成良好 脚部外面暗灰色	杯部欠損	
P6	玄室 床面 5・14	須恵器 高杯	-	(11.6)	9.7	10.6	2段2方向幅狭の長方形形通かし意 脚部に近い北端2本 脚部外面上部カキ目調整	小砂粒を多く含む 焼成良好 杯部内面淡灰色 脚部内外面暗青灰色	杯部欠損	
P7	玄室 床面 8・12	須恵器 高杯	11.8	(4.8)	-	-	有蓋高杯 受部径14.8	杯部内面中央ナテ 内外面とも青灰色 器内非着色	脚部欠損	
P8	玄室 床面 18	須恵器 高杯	13.0	(3.6)	-	-	無蓋高杯	杯体部に2段の後 小砂粒を多く含む 焼成良好 杯部内外面淡灰色	脚部欠損	
P9	玄室 床面 17	須恵器 高杯	14.0	(5.4)	-	-	無蓋高杯	杯体部に2段の後 小砂粒を含む 杯部内外面淡灰色	脚部欠損	
P10	玄室 床面 7	須恵器 長頸壺	9.0	(9.0)	-	-	口縁端部丸みを帯びる 頸部に2本北端	小砂粒を含む 焼成良好 外面暗灰色	口縁部片	
P11	玄室 床面 3	須恵器 壺	-	(8.2)	-	-	外面細かい平行タタキ 内面青海波文	小砂粒を含む 外面淡灰色 内面青灰色	胴部片	
P12	玄室 床面 4	須恵器 壺	-	(12.4)	-	-	外面細かい平行タタキの上をナデる 内面青海波文	小砂粒を含む 外面淡灰色 内面灰色	胴部片	
P13	玄室 床面 6	須恵器 壺	-	(8.8)	-	-	外面細かい平行タタキの上をナデる 内面青海波文	小砂粒を含む 外面淡灰色 内面青灰色	胴部片	
P14	玄室 床面 13	須恵器 壺	-	(7.7)	-	-	外面細かい平行タタキの上をナデる 内面青海波文	内外面青灰色	胴部片	
P15	玄室 床面 12	土師器 直口壺	8.5	14.3	-	3.5	胴部上半をカキ目調整 胴部外面に黒痕あり	小砂粒を多く含む 焼成良好 内外面黄褐色	口縁部の 一部を欠損	
P16	玄室 埋土 H1	土師器 高台付碗	-	(6.2)	-	8.3	底部に八字型の貼付高台 体部上半は著しく風化し剥離化進む	細砂粒を含む 内外面淡黄色		
P17	玄室 埋土	弥生土器 鉢	-	(4.5)	-	5.0	底部片	小砂粒を多く含む 内外面黄褐色		
P18	玄室 埋土	弥生土器 壺	-	(4.0)	-	7.2	底部片	0.5～2mm大の 砂粒を多く含む 外面茶褐色 内面黒灰色		
P19	玄室 埋土 H8	土師質土器 杯	6.2	1.1	-	4.0	小杯 底部未切り底	内外面淡黄褐色		
P20	玄室 埋土 H8	土師質土器 杯	6.4	1.2	-	3.6	小杯 底部未切り底	内外面淡黄褐色		

第1表 大崎山古墳出土土器計測表

標号	出土地点 層位 遺物番号	器種	法量 (cm)				形態・特徴 (cm)	文様・成形・調整手法	胎土・色調	備考
			口径	器高	脚高	底径				
P21	玄室 埴土 H2	土師質土器 羽釜	20.0	(4.8)			煮炊具 口縁部横ナデ 体部外面タタキ目	内外面橙色 外面煤付着 硬質	播磨型	
P22	玄室 埴土 H5	土師質土器 羽釜	23.2	(5.9)			煮炊具 口縁部横ナデ 体部外面タタキ目 立ち上がり高は低い	内外面橙色 外面煤付着 硬質	播磨型	
P23	玄室 埴土 H11	瓦質土器 羽釜	26.0	(5.3)			煮炊具 口縁部ナデ 口縁部粘土帯貼付け・指面圧痕残る	小砂粒含む 内外面灰色 軟質	土佐型	

第2表 耳環計測表

番号	種類	径 (mm)	厚み (mm)	切り口間 (mm)	重さ (g)	備考
E1	耳環	23.0×22.0	5.0	1.5	4.0	銅芯銀張り・銀製耳環
E2	耳環	23.0×21.0	5.0	0.8	3.0	銅芯銀張り・銀製耳環

第3表 玉類計測表

番号	種類	材質	径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	色調	重量 (g)	備考
J1	小玉	ガラス	4.0	3.5	1.2	緑色	0.09	
J2	*	*	2.5	3.7	1.5	緑色	0.05	
J3	*	*	2.4	3.4	1.2	濃紺色	0.03	
J4	*	*	2.9	5.8	1.9	紺青色	0.10	
J5	*	*	3.5	5.0	1.9	紺青色	0.10	
J6	*	*	2.0	4.1	1.5	紺青色	0.06	
J7	*	*	2.5	3.7	1.4	緑色	0.06	
J8	*	*	2.4	3.7	1.1	紺青色	0.05	
J9	*	*	4.3	4.5	1.5	緑色	0.10	
J10	*	*	4.5	5.3	1.8	紺青色	0.12	
J11	*	*	2.8	4.0	1.4	緑色	0.08	
J12	*	*	3.0	3.5	1.5	紺青色	0.05	
J13	*	*	2.6	4.0	1.6	淡黄色	0.06	
J14	*	*	2.7	4.0	1.5	紺青色	0.09	

V まとめ

大崎山古墳は、高知県香南市野市町本村字奥ヶ谷に所在する古墳時代後期の古墳で、今回の調査によって横穴式石室の玄室部が残されていたことが明らかとなった。調査によって得られた所見と今後の問題点に触れてまとめたい。

1. 学史における大崎山古墳

大正10年(1921)12月1日、西川小学校長国吉重親氏の案内で香美郡富家村本村奥ヶ谷大崎山の古墳を実見した武市佐市郎氏は、古墳を観察した内容を翌年「土佐史壇」第7号紙上に報告された³⁴。

当時の記録によれば、「郡道より北へ入りこんで、徐々に行って行った所で、小さい路の一寸打上った所に桑畑がある、其処は同所の国吉俊英氏の所有地であるが、余り大きくはない円塚で、上部は土も少々取れて居る、東西十八尺南北二十八尺の周囲で南口である、羨道は潰れ込みて居る入口の幅が四尺七寸ある、穴の奥行は十一尺、奥幅五尺一寸、高さは五尺五寸、そして屋根は參枚からなつて、奥壁は数箇の石を積重ねて居る、此の塚の三四十間南には、大きなのがあつて今は半畑となつて居るが、其処からは壺や色々の出土品があつたらしい、又北に三個の塚があつたそうだが、是も開壘して形跡を止めない、」と報告されている。

後に、大崎山古墳は土佐の古墳の一つとして周知され、遺跡地名表に記載された。天井石が三枚残された石室は、埋没時の状態としては玄室に短い羨道が設置された小規模な石室に観察され、大谷古墳や溝淵山古墳に後続する古墳時代終末期の小型横穴式石室と推測されてきた³⁵。

しかし、今回の調査の結果、当初の推定に反して埋没した石室の下部から奥壁及び側壁の積石、基底石、袖石などが検出され、玄室の高さと長さが拡大し、現在の町道の西側に横穴式石室の玄室部が残されていたことが判明した。

当時の記録と今回の調査結果を照合すると、古墳の南側から開壘時に出土品があつたこと、古墳北側におそらく中世墓と考えられる塚が存在していたことなどの諸点が留意される。入念に観察・報告された学史上の記録は、現在の大崎山古墳の調査を補完する資料として重要である。

2. 横穴式石室

検出された横穴式石室は、玄室幅に対して玄室長の長い長方形の平面プランをもつ横穴式石室の玄室である。左袖石及び羨道部の大半は現在の道路下に埋没もしくは後世の開壘等により失われていて、石室の全長や羨道部の内容について明確にすることはできなかった。石室は古くから開口し、玄室天井石の一部及び羨道部が近世以前に崩壊していたことは、石室内へ大量に流入していた堆積土の存在と、中世の石室再利用及び土器類の使用などの行為があつたことによっても推考される。玄室の規模や石室構造から羨道部の長さを復元すると、玄門部の袖石から南側にさらに約3～4m前後延長するものではないかと考えられ、石室全長が8.5～9.0m前後におよぶ横穴式石室が存在していたことが推察される。出土品の伝承も羨道部に関連するものと考えられる。

玄室は、玄室長 5.40m 玄室幅 1.90～1.95m を測り、玄室高は 2.10m で玄室幅に対する玄室長の比は 0.35 である。片側の袖石を欠くが、縦長に設置された右袖石の位置や玄室の平面形態から、両袖式の横穴式石室であったと考えられる。奥壁には縦長の大石を配置して鏡石とし、天井石までの間の空間は、石材を横積みに充填し壁面を構成している。側壁は、基底石に比較的大きな石を横置きにして据え、上面にかけて石材を横積みに積み上げている。右袖石の上部にかけて、およそ三段階にわけて積み上げたとみられる横方向のラインが存在し(横目地)、側壁上部端と天井石下端部の境界にかけてのラインまでは、高低差を調整しながら石材を落し込んでいる。使用石材は、天井石の 1 枚にアプライト質岩石が使用されている他は硬質砂岩を主体とし、大谷古墳の調査で観察された使用石材と類似した石材が用いられていた⁹⁶。なお、石室床面には敷石が施されていた。

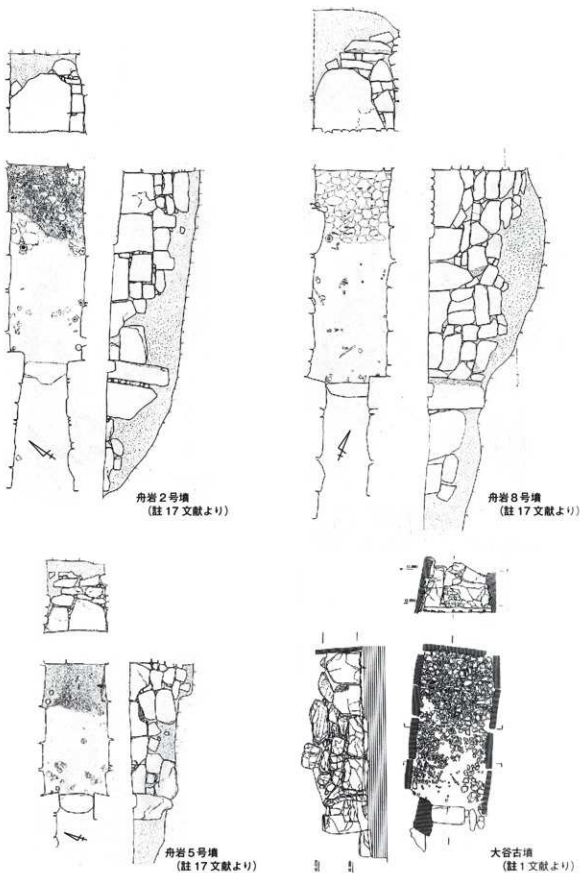
玄門部上部から羨道にかけて、側壁及び天井石が取り除かれていたこともあり、石室は均衡を失い、土圧の加重によって東方向へと大きく傾いていた。従って、側壁の傾斜角度は石室構築時の様相とは異なり、変形していた。そのなかでも当初の構築状況が残されていたのは石室奥壁側で、奥壁の壁面構成は、ほぼ垂直方向に構築されたことがうかがわれる。また、側壁の持ち送りが強くはない。また平面形としては、玄室幅に比して玄室長が増大する傾向を受容した事が取られる。

玄室の構造や構築技法から、本墳は群集墳盛行期の横穴式石室であり、後期古墳としては大谷古墳や溝淵山古墳に先行する古墳であることが明白となった。

3. 出土遺物と検出状態

玄室内から、須恵器高杯・須恵器長頸壺・須恵器甕・土師器直口壺・鉄器・耳環・玉類が、また石室内堆積土から中世の土器類(羽釜・土師質土器)、弥生土器壺・鉢、土師器高台付椀が出土した。須恵器・土師器直口壺・鉄器は主として玄室内の敷石上(礫床)で出土し、奥壁の基底石(鏡石)下端付近で耳環・玉類が出土した。遺物の集中範囲としては、右袖石及び右側壁周辺からの出土が多かった。須恵器類の主体は高杯で、なかでも有蓋高杯の出土点数が多い。須恵器高杯類の法量としては、口径 10.6～11.6cm 底径 12.2～13.8cm 脚部高 9.4～12.5cm 器高 14.1～17.5cm を計測する範囲に収まり、比較的多量に属する。当該期に近い高知平野部の他の横穴式石室出土の須恵器有蓋高杯類を概観すると、脚部はより長脚であり、口径 12cm 以上底径 14cm 以上器高 20cm 前後と数値も高く、器形は大きい。大崎山古墳の有蓋高杯類は、法量としては相対的に中位に位置づけられ、他のグループとは相違する。この法量差が、供給された須恵器類の生産時期の差なのか、高知平野東部、物部川左岸以東に既に古墳時代の地方窯跡が成立しており、独自の須恵器供給体制が存在していたのか、今後検討を要する課題である。

中世の土器類は、羽釜・土師質土器類などの日常雑器が中心である。その出土状態としては、石室内に持ち込まれ遺棄されたと考えられるもので、出土遺物が示す 15 世紀前半頃に石室内の空間が再利用されていたことを示すものである。石室が仏堂や祠として代用され土器類が供献された例は、他の横穴式石室の調査例によっても知られるところであるが、今回の調査では仏具・仏器などに関連する遺物は出土していない。信仰の存在を積極的に証明する手掛かりは少ないが、居住地や農作地で使用された不用の品が投棄されたと考えられるよりも、日常生活で使用する煮沸具を中心とした土器類を石室に供献する庶民信仰などが存在していたことも充分に考えられる。



第11図 舟岩2・5・8号墳・大谷古墳横穴式石室

中世の村落景観のなかで、時代の変遷を受けた古墳の存在がどのように扱われていたのか、関心が持たれるところである。

4. 石室構造と築造時期

大崎山古墳の横穴式石室は、玄室幅に対して玄室長の長い長方形の平面を呈する玄室を有していた。この石室に類似した横穴式石室を構築しているのは、南国市岡豊町舟岩・小蓮・笠の川に所在する舟岩古墳群である⁹⁷。同古墳群の2号墳・8号墳の玄室は、玄室幅に比べて玄室長が長い幅狭で長方形の平面プランを有した両袖式の横穴式石室で、袖石は縦長に据え玄門立柱とし、玄門部に仕切り石(敷居石)を配置している。玄室長5.0～5.5m玄室幅1.84～1.94m前後で、長さ3.4～3.6m幅1.20m前後の羨道が設けられている。奥壁は、ほぼ垂直方向に積み上げられ、壁面に鏡石となる大石を配置する。側壁は、袖石の上部にかけて2本の横目地が認められ、壁面の傾斜は垂直方向である。石室構造としては上記の如く類似点が認められ、舟岩古墳群で用いられた構築技法の範疇に属することが窺える。なお、舟岩古墳群では、5号墳のように玄室幅が広い長方形の平面規格を有する古墳も存在し、石室形態の変遷が認められる。大谷古墳(香南市野市町大谷)では、舟岩5号墳の石室形態に類似した石室が採用されている。2号墳・8号墳の石室形態と5号墳の石室形態は、高知平野に展開した横穴式石室のなかで、周辺地域に影響を与えることのできた類型化された石室構築技法であると考えられる。

大崎山古墳は、各地で横穴式石室が盛行し、古墳が築造された段階の後期古墳であり、群集墳が形成された時期に該当する古墳である。その時期は、子持高杯・子持壺などの装飾須恵器類と豊富な須恵器類・武器類・馬具・工具類が副葬された舟岩2号墳や多量の須恵器類が副葬され須恵器円筒埴輪をもつ伏原大塚古墳(香美市土佐山田町伏原大塚)⁹⁸などの大型首長墓が造営され、追葬行為があった時期と重複している。

大崎山古墳からは、高杯を中心とした須恵器類・土師器直口壺・鉄鎌・耳環・玉類が出土している。須恵器高杯類はTK43型式併行期の範囲で捉えられるが、TK10型式よりも新しくTK43型式の新しい段階(新相)までは下降しないと表現した方が適切である。6世紀第三半期から第四半期にかけて、概ね6世紀後半の前半期を前後する時期に所属するものではないかと考えられる⁹⁹。

5. 大崎山古墳と古墳築造集団

大崎山古墳の横穴式石室は、検出範囲が玄室に限られてはいたが、細長い長方形の玄室であることが確認され、玄室の床面積は10㎡以上を測る。石室の規模としては大型古墳の範疇に属し、主要な群集墳中に存在しているも遜色のない規模と構造を有していた¹⁰⁰。この古墳が、本村地区の丘陵裾に単独で築造されていることは、古墳時代後期の地域社会のなかで、現在の本村・兎田地区を含む周辺地域が重要な場所であったことが窺われる。また、この地域が古墳時代後期の早い段階に開拓されて発展し、本古墳に埋葬されたような地域の有力者を輩出していたことが明白となった。

舟岩古墳群でみられる石室類型を採用して大型の石室を構築し、法量に一定のまとまりのある須恵器高杯類・鉄鎌類・耳環・玉類を副葬していた点は、大崎山古墳の被葬者が、地域の豪族層にと

どまらず、この時期の高知平野部の有力者と政治的な関係を有していたことが指摘される。副葬品の差異は、被葬者が属していた階層差と考えられ、須恵器高杯類の法量差にも反映していたものと推察される。少量ではあるが鉄鏃類を保有していたことは、被葬者の社会的な側面を示し、地域の軍事的な編成に参画していた可能性を帯びる。また、地域の首長墓(豪族墓)に準じた石室を構築していることは、高知平野部の豪族層を含めた政治的な結合体のなかで社会的な役割を果たしていた人物像として想定されるものである²⁰⁾。

註

- (1) 山本哲也 編 「大谷古墳」 財団法人 高知県文化財団 1991年3月
- (2) 坂本憲昭 編 「野市町本村遺跡調査報告書」 野市町教育委員会 1993年3月
- (3) 岡本健児・岡本桂典「高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画をもつ銅剣」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』第3号 高知県立歴史民俗資料館 1993年3月
- (4) 「大崎山古墳は6世紀円墳か」1994年3月23日付 高知新聞朝刊紙面 高知新聞社
「大崎山古墳」『高知県埋蔵文化財センター年報3 1993年度』財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター 1994年
- (5) 香南市プロフィール・統計情報 「香南市役所ホームページ」(平成23年4月未段階)
- (6) 武市佐市郎 「土佐の古墳」『土佐市壇第七号』(大正11年2月11日)
武市佐市郎 「土佐古墳の分布」『土佐市談第五拾壹号』(昭和十年四月廿九日)
安岡源一 編 「高知県縄文式弥生式古墳文化遺蹟地名表」 昭和二十七年
岡本健児 編 「高知県史考古資料編」 高知県 昭和四十八年
- (7) 平成2年度までは、本村地区の背後の丘陵上に、弥生土器遺物散布地である笹ヶ峰遺跡が知られ、また本村遺跡は、県道沿いの遺物散布地として認識されていた。本村地区の谷奥から丘陵尾根部にかけて弥生時代の遺跡が形成されていることが確認されたのは、平成3・4年度の試掘調査の成果による。
- (8) 上記註2)文献
- (9) 註1)文献に、調査前の大崎山古墳を紹介している。4ページ下段に石室内に散在する五輪塔が見える。石室内へは植物の根茎が多数進入していた。
- (10) 五輪塔を用いた中世墓地の形成が鎌倉時代後半まで遡る可能性もある。
- (11) 現状は蜜柑畑として開墾されている。
- (12) 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店 1991年
- (13) 吉成承三氏のご教示による。
- (14) 註6)文献参照
- (15) 廣田典夫(大崎山古墳)「古代編」『野市町史』上巻 野市町 平成4年
調査前の大崎山古墳は、玄室長約3.6m 幅1.7m 高さ1.8m ほどの計測値が得られ、7世紀初頭頃に築造された後期末の古墳とみられる状況であった。奥壁側から三枚目の天井石は、天井部の平坦面から一段下がり、玄門部側の楣石のような状態で、小型石室のように観察される状態であり、発掘調査を実施するまでは大谷古墳に後続する古墳と考えていた。
- (16) 硬質砂岩は、大谷古墳の背後の金剛山(三宝山)の丘陵谷部から産出する。
- (17) 岡本健児・廣田典夫・片岡鷹介 「高知県舟岩古墳群」 高知県教育委員会 昭和43年3月

- 08 廣田佳久 編 『伏原大塚古墳』 土佐山田町教育委員会 1993年3月
- 09 山崎信二 『古代瓦と横穴式石室の研究』 同成社 2003年
山崎論文では、TK43型式併行段階を6世紀末(580年以降)におかれている。
- 20 清家章 編 『南国市における大型後期古墳の調査』 高知大学人文学部考古学研究室 2006年
- 21 欽明から敏達朝にかけては、内外にわたる動乱期である。高知平野部の首長層においても、時代の趨勢のなかで、地域間の緊張関係や軍事的な編成と無縁ではなかったことが推測される。

写 真 图 版



大崎山古墳遠景（南東から）



大崎山古墳遠景（東から）



大崎山古墳近景（南東から）



大崎山古墳開口方向（北東から）



大崎山古墳近景（南から）



大崎山古墳近景（北から）



大崎山古墳 墳丘と石室開口部



大崎山古墳 石室開口部



石室検出状況（南東から）



石室検出状況（南東から）



土師器直口壺出土状態（西から）



耳環出土状態（南から）



石室全景（南東から）



石室奥壁（南東から）



右側壁（東から）



左側壁（南から）



床面の敷石（南東から）



右袖部（東から）



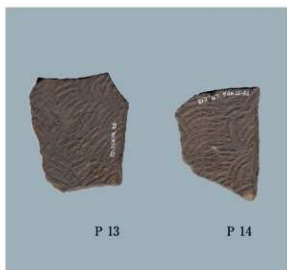
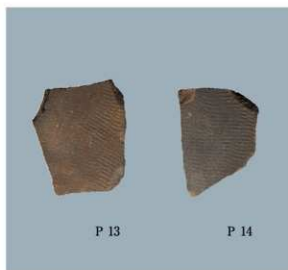
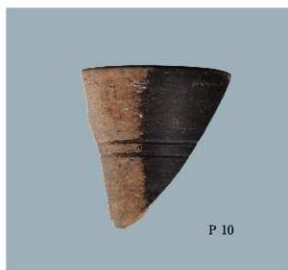
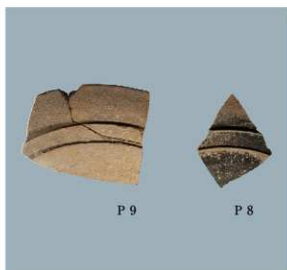
奥壁（南東から）



玄室奥壁側（南東から）



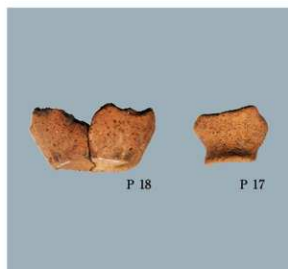
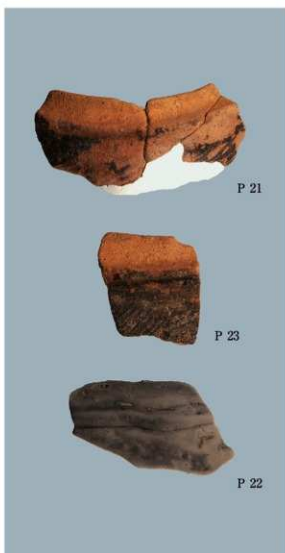
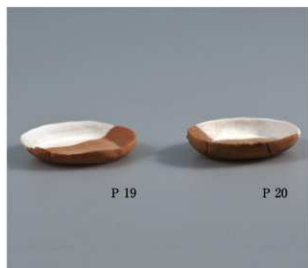
出土土器 (P 1 ~ 6)

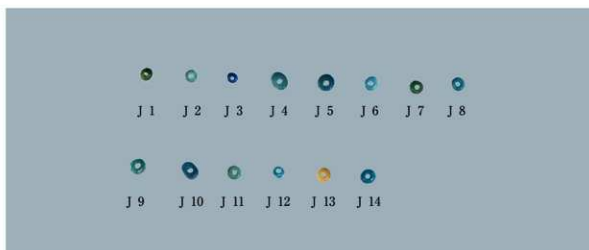
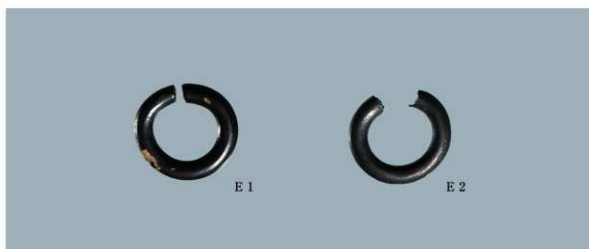


出土土器 (P 7 ~ 10 · 13 ~ 15)



出土土器 (P 11・12)





(上) 耳環 (中) 玉類 (下) 鉄製品

● 大崎山古墳



大崎山古墳の位置と周辺の地形（平成元年撮影）

報 告 書 抄 録

ふりがな	おお さき やま こ ふん							
書 名	大 崎 山 古 墳							
副 書 名	高知県香南市野市町本村所在後期古墳の学術発掘調査報告書							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	高知県香南市発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第11集							
編 著 者 名	山本哲也							
編 集 機 関	高知県香南市教育委員会 香南市文化財センター							
所 在 地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL.0887-54-2296							
発 行 年 月 日	2013年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおさきやまこふん 大崎山古墳	〒781-5201 高知県香南市 のいちちょうほんむら 野市町本村字 おくがたにおおさきやま 奥ヶ谷大崎山	39324	200035	33° 34' 40"	133° 43' 35"	1993.02.07 ～ 1993.03.16	10m ²	確認調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大崎山古墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器 土師器 耳環 玉類 鉄製品		6世紀後半の後期古墳 横穴式石室の玄室が確 認され、地域の大型古 墳であることが判明し た。		

高知県香南市発掘調査報告書 第11集

大崎山古墳

- 高知県香南市野市町本村所在後期古墳の学術発掘調査報告書 -

2013年3月

発行 高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター
〒781-5453 高知県香南市香我美町山北 1553-1
電話 0887-54-2296

印刷 株式会社 飛鳥